



Dale Pastoral Center

DPC ニュースレター

2020年12月1日 第5号

巻頭言

今、「不在のミニストリー」を考える

DPC 所員 堀 肇



新型コロナウイルス感染症が発生したとき、このような事態が発する問いかけや意味などを考える余裕もないまま感染防止対策に神経を使う毎日となりました。礼拝も休止を余儀なくされ、自宅礼拝用テキストの作成や説教動画の配信、電話やメールによる教会員・関係者への牧会配慮など、牧師として普段とは異なった奉仕の時を過ごすことになったのです。

そうした中で、ある方が「先生が言っておられた不在のミニストリーを思い出しました」と、励ましのメールを下されたのです。感動したのは学んだことを思い出してくれたことです。この「不在のミニストリー」という概念はヘンリ・ナウエンの『傷ついた癒し人』に出てくるものです。

牧会でなくても対人援助の働きは、相手と共にいること、現存（プレゼンス）によってなされることを誰もが理解しています。一緒にいて慰め、励まし、支えるという奉仕です。しかし、この働きは共にいないこと、不在（アブセンス）によってなされ得るもので、遠く離れていても祈りや想起の中でお互いの関係を深めることができます。逆に言えば、そばにいても距離が近すぎて相手が見えなくなり、かえって親密さを得られないことがあります。本当に良い関係は現存と不在の相互

作用の中で出来てくるものだと思います。

私は家族カウンセリングの中でも、よく親御さんに「心理的、物理的に少し離れ、かつ温かく接してください」とお勧めすることがありますが、どんな人間関係でも距離を取り、時にはそこにいないことによって良い方向へと変容する可能性があります。これが「不在のミニストリー」というものです。

私たちはウイルス感染防止のため「3密」を回避し、人との距離（ソーシャル・ディスタンス）を取ることを求められ、集会や交わりが難しくなり、対面型のコミュニケーションに大きな制約を受けています。しかしこの状況のすべてがマイナスではありません。一時的に共にいないことによってお互いの関係を静かに振り返ることになり、祈りが深められ、対人感情も温かくされていくのを感じるがあります。

パウロも「わたしは体では離れていても、霊ではあなたがたと共にいて、……キリストに対する固い信仰とを見て喜んでいます」（コロサイ人への手紙2章5節）と記していますが、時として「不在」の中には、このような恵みの世界が存在することを心に留めておきたいと思うのです。

DPC のプログラムとして多くの方のご期待をいただいていたものに、教職者のための「牧会研究会」と、広く一般の方を対象とした「詩編と祈り」の2つの講座があります。

「牧会研究会」では、毎回テーマを据えて講師の発題があり、それを受けて参加者が感想や意見を分かち合います。日頃の牧会上の諸課題が俎上にあげられ、互いの牧会の観点が分かち合われ、たいへん得がたい振り返りの場となるのです。また、キャロル・サック宣教師により昨年2期にわたって開講された「詩編と祈り」では、詩編とハーブ、歌声を通じて、信仰を持つ者も持たない者も共に大きな恵みを分かち合い、霊性を養われる経験を重ねてきました。

ところが本年は新型コロナウイルスの影響で、予定されていたプログラムを断念せざるを得ず、私どもも参加予定者もたいへん残念に思っていたところでした。そこで、所員会では参加を希望されたかたがたに伝えることはできないものかと、オンラインでの開催の可能性を探り、実施することといたしました。以下それぞれについてご報告をいたします。(事務局)



「オンライン牧会研究会」

DPC 所長 齋藤 衛

この時期、教会はさまざまな課題に直面しています。牧会者は孤立しがちでしょう。このような危急の時であればこそ、牧会研究会で現実を共有し励まし合う時間を得るのは必要なことです。実際に集まることはできないとしても、オンラインを使って互いの声を聴くことは意義あることと考えました。

さて、その「オンライン牧会研究会」が10月16日に開催されました。本稿ではその内容と共に、現下の新型コロナウイルスの状況が決して「負の側面」だけではないことを捉え直したいと思います。

まず、所員である堀肇先生にお話をいただきました。前号のニュースレターに記して下さった「新型コロナウイルス感染症問題から学ぶ」の論考をもとに、文章に書き切れなかったことやより詳しい説明を先生にお話しいただきました。文字とはまた違う味わいで私たちの心に届いたことでした。以下、断片的なまとめとなるかも知れませんが要旨を記します。

●いま、もう一度考える時

現在、誰しもがこれまで経験したことのない状況に立たされています。特に教会は共に集まり礼

拝共同体として生きてきたことを思えば、その中核的な活動ができないという事態であり、これをどう生きるのか、この問いの前に立たされています。不安になることもあり、日々の慌ただしさの中にありますが、この時を、立ち止まってもう一度考える機会としたら良いと先生は意味づけられました。特に、沈黙・みことばの黙想の機会となると。もう一度考える機会という意味では、教会の本質を考え直す機会でもあったとされました。会うことができない分、これまで以上にご自身の牧会的働きは多くなったのですが、むしろそこに霊的共同体としての教会が実際にあるということを変更して痛感させられたとのこと。アドラー言うところの「共同体感覚」はむしろ教会がすでに持っていたことであり、今またそれを正面から捉え直すべきではないかとしておられました。そこでヘンリ・ナウエンの言う「不在によるミニストリー」を示されました。「想起」の中で真実にふれあうことができる人間の事実を紹介してくださり、今は、不在のミニストリーが行われるよい機会であると。終わりに、観点を変えて今回のコロナ禍はグローバリズムの負の側面が露わになったことでもあると指摘され、慎みのない行動への警鐘が鳴らされているとされました。今後の問題として考えられるのは自国第一主義、保護主義、分断などが社会に出現することです。グローバリズムの影響を少なからず受けてきた教会の

姿がそこに重なるのであり、その問題を教会の脈絡で捕らえなければならない。つまり、教会が多様性を失うことなく、かつまた一つの体である連帯性を失わないことだと。

以上のお話を受け、参加者それぞれに示唆と新たな観点とをいただけたことでした。私にとっては、先生が何度もおっしゃっておられましたが、今回の新型コロナウイルスによって生じた事態を決して否定的に考えず、むしろ重要な意味を見いだす契機として捉えることだと示されました。

●それぞれの場所で立ち続けること

さて、今回のオンライン牧会研究会には 10 名の参加者がありました。後半は二つのグループに分かれてそれぞれ意見交換しました。そこでは参加各教職が直面した牧会の現実と、それにどう対処してきたかを分かち合いました。非常事態宣言の期間中も礼拝を継続した教会、礼拝に集まることはやめてオンラインだけを使った教会、ご高齢のかたたちが多い教会はオンラインではなく文書を郵送して対応してきたなど、それぞれの様子が分かち合われました。これらの経験を通して、最も弱いところに大きく影響を及ぼす出来事であることが浮き彫りにされました。

礼拝に集まることやオンラインの集まりに参加できないかたがたにどう配慮するか。手紙や電話での牧会がにわかに増えたという声、祈りにおぼえることに努めたという声、いずれも見えないかたがたをどう理解し配慮するかという課題に向き合わされました。このことは普段よりも苦労があったことではありましたが、こういった配慮がいかに大切であるかに気づいたことでもあります。その点で堀先生の話された「不在のミニストリー」が心に届き励まされたとの感想がありました。

一方で感染したかたを共同体がどのように受け止め牧会者がどのように配慮してゆくかなど、困難な問題があることを共有しました。牧会者自身がいかに弱さに焦点を合わせて働くかが求められています。

悩ましさの一つとしてあげられるのは、オンラ

イン時代のコミュニケーションの困難さでした。場を同じくしての対話なら言葉のうえでの齟齬はある程度乗り越えられるかと思われませんが、ネットの上での言葉や、オンライン画像を通してのコミュニケーションでは、その齟齬を解消するために多くの時間を割かなければならないことがあります。あるかたはご自身のそういった経験を通して、乗り越えることが出来たのは信頼する心があったためと話してくれました。

このように牧会者にとって大きな波が押し寄せた時期でしたが、同時に何が大切であるかを示してくれることでもありました。信徒とのこんなやりとりを紹介してくださったかたがいます。ある信徒のかたがこう告げたそうです。「(オンラインの) 画面で先生が元気で立っている姿を見るだけで涙が出る」と。「あっ、そうなんだ、画面を通してでもお役に立っているんだ」と気づいたとおっしゃいました。聴いていた私たちには温かな笑いと共にこの牧師と信徒の間に交わされている信頼の尊さが胸に迫り、励まされたのでした。対面の礼拝出席が少なからうと、オンラインであろうと、説教する姿を見るだけでも涙が出るという信徒の心に信頼して、働きに立ち続けたい。

これまで当たり前だと思っていた共に集まる場を失った私たちは、これまで以上に「信頼」する心が求められているのではないのでしょうか。主に信頼し、聖霊に信頼し、信徒を信頼し、小さな自分の働きにも信頼する。共に集う見える場は失ったかもしれないですが、信頼し合う見えない場はいまだしっかりと生きています。この信頼という霊的な場こそ私たちが持ち続けなければならないものであることに気づかされました。

福音はさまざまな時代と状況を生き抜いてきました。目に見える形は変化の波にさらされながらも、その都度、福音の本質に立ち帰って教会は霊的共同体を形成してきたと思います。今回の牧会研究会はそのための勇気と覚悟を互いに確認できた機会ではなかったかと思います。

このような機会を今後も DPC が提供し、さらに教会に貢献するものでありたいと強く思われました。



詩編の学び

～これまでもこれからも～

中山 康子

(JELC むさしの教会員)

●コロナでコロブナ…？

コロナ禍が幸福観や人生観にどんな変化を与えたでしょうか？ 歩(＝ブ)があるとするれば、逆説的とも言える負からの奮闘の末にいただいた恵みです。

10月17日と11月21日、キャロル・サック宣教師による講座「詩編に聴くひととき」が、Zoomによって実現できました！

初回の主題は「Peace in the World 平和を祈る」でした。世界の平和は個人の平和からと、キャロル宣教師らしく、キリスト教の神に限定せず“自分を越えた偉大な何か”の語りかけに耳を傾けましょと、BMT(Black Lives Matter=黒人のいのちは大切)運動に触れての講義に続いて小グループに分かれた話合いも持ちました。31名が参加。講師、通訳、受講者、事務局それぞれが別々の自分の場所からのライブ配信でした。2回目の主題は「What Gives My Life Meaning? わたしの生きる意味とは」でした。

昨年4月から新しく始まった「詩編と祈り～音楽のスピリチュアリティとともに～」の講座は1年を前期後期に分けて全8回、2年間を通して16回として計画されていました。受講者として加わった中にはクリスチャンでない方々も遠方からの参加者もおられました。今年4月から従来の形で講座が継続されるはずでした。コロナ対策で中断・延期を余儀なくされ、後期の講座継続が叶わなくなり中途半端になってしまいました。

●コロナでコロブナ

歩(ブ)がありました。コロナ禍で、なんとか方法を模索して、詩編を用いた「沈黙の詩(うた)～今、慰めを必要とされる方のために」と題して12回のビデオが作成され、ルーテル学院大学のホームページから発信されました。第1回目の配信となった詩編23編の収録はイースター直前の受苦日(4月10日)のことでした。2回目が出来るか危ぶまれる中、直後に緊急事態宣言が発令され、ステイホームとなった時期でした。生活が思うように行かなくて落ち着かない不安な日々、わずかな時間の沈黙がどれほど貴重で有用であるか実感しました。

この企画と制作にあたっては、セイフティ・ディスタンス(注1)を保ちながら、学内のネットワークを駆使し、特に広報センターの協力を得ながら、インターネット配信という前代未聞の、しかも目に見えないサイバーの世界を相手に手探り状態で12回の「沈黙の詩」が配信されました。この「果実」は制作者側には奇跡としか考えられません。

詩編16:11、詩編23、詩編25:1,5、詩編27:13-14、詩編31:6、詩編39:5、詩編46:11、詩編57:2、詩編67:2、詩編71:12、詩編84:6、詩編116:7、以上12回がwww.luther.ac.jpで現在でも視聴が可能です。各回は短くて4分、長くても7分弱です。キャロル宣教師のハーブと歌で静まって過ごすことができます。繰り返し聞ける、心を落ち着かせられるなど多くの反響をいただきました。

一方、4月に開講予定であった「詩編と祈り」第Ⅲ期の講座の再開は目途が立たず、半年後の9月になっても不可能のように思われました。キャロル宣教師の講座は、講師と受講生が顔と顔を合わせて呼吸を身近に感じながら接した上で進められる、まさ

に「3密」です。講座はこのまま中止になるのかと心苦しい時間を過ごしました。ニュースでは、8月の自殺者、特に若い女性の比率の増加、鬱症状傾向者の増加等々コロナ禍で従来にも増して苦しんでいる人のこと、ひとり親の苦勞、リモートワークで家族同居時間が増えたことでの夫婦間・親子間の困難も報道されていました。

この状況に、講座を何らかの形で出来ないか、技術的な不安はありながらも、また従来での講座開設を切に希望しながらも、祈りつつ実現を目指すことになりました。「沈黙の詩」で得た経験を重ねながらやってみるしかないとの思いで、9月半ば“オンライン”に向けて始動しました。その結果、オンラインだからこそその遠方からも、新しい人からの申し込みも増えて「詩編に聴くひととき」各回2時間半、全2回のオンライン講座が可能になったのです。

●With コロナだから、続いている（続かないわけがない）

以上の経緯の底辺には、キャロル宣教師の心意気があります。コロナ禍であろうと無かろうと何とかして、どのような人にも、神さまのヘセド（注2）を伝えたいとの熱い思いをお持ちです。新しい試みではありますが状況が許すかぎり工夫して、“開設しないより開設できる方法で開設したい”と考えるに至りました。ヘセドは、困難な世の中にこそますます必要です。伝える方法が変化しても神さまのヘセドに変化はないのです。

講座で用いる詩編には、もともと弦楽器や打楽器等を伴奏にして歌われてきたという3千年余の歴史的な経緯があります。全150編の中には、苦しみ・悩み・怒り・不満・嘆きを叫びながら呻きながら神さまに感情を訴えている内容が60%以上を占めています。

ます。きれい事ばかりでなく、繰り言、あざけり、敵への憎悪、人間のあらゆる感情の吐露が包み隠さず遠慮無く表れています。それでも1編（88編）を除いて、どんなに荒々しい感情も、最後には主への信頼・賛美で終わります。こうしてヘセドが分かち合われるのです。

キャロル宣教師は2006年から12年間にわたって、JELA(日本ルーテル社団)にてリラ・プレカリアの養成講座を持ち、困難を覚える人、死に瀕する人びとにハープと祈りを届ける奉仕者を育てました。また、自らもハープと祈りで人びとに寄り添う訪問を続けています。刑務所には傾聴ボランティアとして赴き、依頼があれば160cm15kg以上の重量があるハープを転がしながら、背中にザックを背負って新幹線での移動をものともしないキャロル宣教師。彼女は、私生活においても一貫して、時が良くても悪くてもヘセドを一人でも多くの人に伝え分かち合うために、いつも前向きです。

今後しばらくはWith コロナで、新しい工夫も凝らしながら、でもなんとか対面して学びたいと願いながら「**メリー・クリスマス!**」。

（注1）広く言われている「ソーシャルディスタンス」はインドでは穢れた人との距離を保つ意味として使われていることを知り、ここでは「セーフティ・ディスタンス(safety distance)」を用いる。

（注2）ヘセド(Hesed)ヘブル語。“恵み”、“神の恵み”などを意味する。日本聖書協会訳は“憐れみ”と訳出。

ご執筆いただきました中山康子さんは、長い年月キャロル・サック宣教師と共に活動され、一連の詩編の講座では通訳のご奉仕をしてくださっているおひとりです。（事務局）

「いま、教会の牧会は

～COVID-19の只中で見ていること～

DPC所員 石居 基夫



【不便・不自由の中で】

ルーテル学院大学の東門を入ると、正面にチャペルが見える。その左右に広がる本館校舎も含めて、いくつもの大きな板や四角柱や円柱を組み合わせたようなデザインは、太陽に照らされた時の光と影が複雑に重なって美しい。建築家村野藤吾による傑作の一つとして知られる。校舎の中は、横に広がった長屋のような作りは入り組んでいて、廊下は右に曲がったと思えばすぐに左と幾重にも折れている。複雑に入り組んだ校舎は、迷子になりそうな雰囲気だ。もっともこれはほとんど一本道なので、決して迷うことはないのだが、不安になる。折れ曲がった廊下は、凝ったデザインのゆえだが、油断をすると、廊下の壁にぶつかりそうにもなる。

どうして、こんな複雑な姿なのか。

村野氏はこの学校を設計する時、教室から教室、また研究室へと移動をする人が、常に自分の前を歩く人の姿を見ないように、折れ曲がった複雑な廊下をデザインしたという。前に行く人はすでに向こうの曲がり角を曲がっているというわけだ。この建物は使い勝手が悪いかもしれないが、むしろその不便さによって自分と神との垂直的な関係に集中するようにと促される。

「ソーシャル・ディスタンス」。

私たちには、大きく変わってしまったこの日常は、不便この上ないと感じられることも少なくない。しかし、この不便さの中で、私たちは何に目をむけているのだろうか。私たちが慣れ親しんできた「通常」の便利さを、いずれ取り戻すことだろう。でも、この不自由さの中に、私たちは、私たちの「いま」を深く問う時が与えられているよ

うにも思う。この時に、神と私との関係への集中の時が与えられているのかもしれない。

【私たちの現実と神学】

COVID-19の感染拡大を受けて、私たちのそれぞれの教会は自分たちの礼拝や集会、行事や活動を見直して、特別な対応が強いられてきたが、特にも礼拝では、風通しや座席の配置、人数の制限やシールドの設置など物理的な工夫ばかりではなく、時間的にも短縮し、また讃美歌を歌わず、聖餐式を祝わないなど、具体的な礼拝のあり方そのものにまで変更を加えることを余儀なくされた。また、オンラインでの配信や説教原稿の郵送に至るまで、実践的な対応を工夫してきたわけだ。すでに、様々なところで、こうした現実的な対応について改めて神学的に考えていく必要性が語られ始めている。礼拝とは何か、聖餐式はオンラインでも可能なのか。本質的で神学的な議論は始まったばかりだが、これは単にウイルス対応だけではなく、現代の様々なメディアや人間関係のあり方の変化の中で、今まで追いついてこなかった神学的な取り組みによりやうやく皆が向かい合っているということかもしれない。ウイルスがたとえなくても、あるいは過ぎ去っても、私たちが避けて通ることのできない現代の神学的な課題が、このウイルス感染という事態の中で顕在化したということでもあるのだ。

複雑で抽象化の進んだ現代社会において、AIやICTの進化はこの20年間ほどで私たちの生活のレベルで劇的な変化をもたらし、活動も人間関係のあり方も大きく変わってきている。人間の本質なんてそんなに変わりはないとも言えるけれど、言葉が変わり、コミュニケーションのあり方

が変わり、経験も全く変わってきている現代社会の中で、「福音」は一体どのように分かちあわれるのだろうか。

【現代の牧会を見直すために】

デール・パストラル・センターと日本ルーテル神学校は、こうした現実に向かい合っている現場の牧師たちと共に学びたいと、今回の臨床牧会セミナーを企画している。ご多分に漏れずこのセミナーもオンラインでの開催となる。すでにこの一年で多くの企画がオンラインとなり、私たちも随分とこれに慣れてきたと思うけれど、やはり本当は顔と顔を合わせて交わりの時を持つことの方がどれほど力になるかと思う。けれども、こうした開催方式だからこそ、全国どこからでも参加いただき、率直にそれぞれの現場での取り組みの中から現代の牧会について学び、また語り合う時としたいと思う。神学はいつでも宣教と牧会の現場から始まる。

第4回目を迎える今回、私たちの今の牧会のリアルを分かち合いつつ、共に神学を深めていきたいのだ。なぜなら、私たちはこの不便と不自由さの中、特にも礼拝を通常のように持つことができない時を重ねて、改めて牧師の務めについて考えさせられてきたからだ。すでに一年近くの時を過ごすことで、緊急に必要なだった対応の時期を過ぎ、「ウィズ・コロナ」と呼ばれる状況へと進みながら、私たち教会の活動は随分と様変わりをしてきたと思う。かつての日常になかなか戻れないというばかりではなく、すでに私たちが直面していた様々な課題がじりじりと首をもたげてきているのだ。不便さと工夫ということだけではない、私たちの牧会の現場。そして、この経験したことのないような状況の中で「ポスト・コロナ」と言われる時代へ向けて、私たち自身の実践的で神学的な課題を明らかにしていきたいと思う。その問いに真っ直ぐに向かい合って学び合う時を持ちたいと思うのだ。

【企 画】

全体のテーマは「いま、教会の牧会は～COVID-

19の只中で見ていること」。

今回は今までもご案内してきた全国のルーテル教会5教団の牧師たちにこの企画に一人でも多く積極的に参加いただき、学びを共にして欲しいと願っている。それぞれの教会に今までは何名までとの参加目安をお願いしてきたが、今回はその制限を持たない。

日時は、2021年2月8日、15日、22日の3回、毎週月曜日の午後2時から2時間半としてZoomで開催する。それぞれの回は、まず講師に発題をいただき、それに続いてブレイクアウト、つまり参加者に少人数に別れていただきグループディスカッションをしていただく。最後に簡単なまとめを行うという方式としたいと考えている。

第1回目(2月8日)は「新しい牧会様式(仮)」。

この一年の経験の中で、教会がどんなチャレンジを受け、またその中で見出してきたことがあるのか。日本基督教団吉祥寺教会牧師、日本聖書神学校、そして私たち日本ルーテル神学校で「牧会学」を担当されている吉岡光人先生を講師として迎える。

第2回目(15日)は、「引きこもりの時間から(仮)」。

現代を生きる私たちはどのような心の世界を経験しているのか。とりわけ若い人たちが生きている、新しい時代の課題に触れていきたい。静岡県デンマーク牧場こひつじ診療所の精神科医、武井陽一院長に講師をお願いした。

第3回目(22日)は「マルタたちの居場所(仮)」。

共に食事をすることや交わりを持つことを制限せざるを得ない中、信徒たちの活動と信仰は、どのような揺れ、また課題をみているか。特に女性に視点をおいて考えてみたい。日本ルーテル教団の教職梁熙梅先生に発題をお願いした。

ルーテル5教団の牧師たちを対象にご案内を改めてお送りするので、お申し込みをいただいて参加のためのURLを送る方式としたい。参加費は無料。この機会に教団を超えてルーテルの牧師たちと交わりと学びの時間を充実したものにしたと思う。

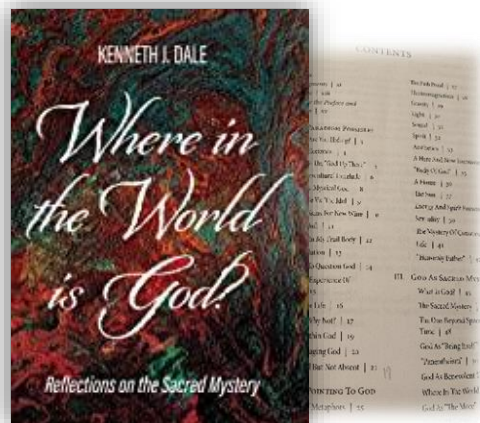


Where in the World is God?

Reflections on the Sacred Mystery

(Resource Publications, 2019)

今回は、Kenneth・J・Dale 先生が昨年出版された本を
キャロル・サック宣教師よりご紹介いただきました。



この本はめずらしい本です。物語でもなく、通常の意味での学術的な論文でもないのです。この本はその読み手に自分の魂における対話を促すものです。タイトルが示すように、著者は、今までに無いような様々な角度から神の本質に出会うための真摯な探索へとわたしたちを導くのです。

ケネス・デール先生（デール・パストラル・センターの名は先生に由来します）は、多くの人たち、特に 35 歳以下の人々にとって「教会の話」などというものは無意味なものであるらしい、と気づきました。先生はまた、ご自身でさえ自分の魂のうちに様々な疑問が湧き上がってくることに気づきました。本書で先生は「教会から離れていった」人たちのことについて、そして、逆に自分の内には確かにいつも疑問を抱きながら信仰にとどまっている人のことについても、率直な考えを示されています。

デール先生は問い続けます。「キリスト信仰の伝統的な解釈は、もはや時代遅れで、ただ誤解を招くものになってしまったのではないか。私たちが自分たちの信仰を表してきた言葉は、もはや『単なる言葉だけ』になってしまい、本来、その言葉の背後にある本質の持つ力を失ってしまっているのではないか。私たちの持つ神の概念やイメージは、神のお創りになったこの大きくて果てしない世界を語るには、あまりに小さすぎるのではないか。私たちは、本来は大いなるものが私たちのいのちを畏敬の念で満たすよう委ねるはずなのに、神という私たちの考えた偶像を作り上げてしまっているのではないだろうか。」

デール先生は、そもそも聖なるものを言葉でとらえることなどできるはずもないのに、その聖なるものをなんとか言葉にして表現するしかないという皮肉を認めています。ですから、先生はまるで詩を書くように 88 の短いエッセイを、魅力的に書いています。どの章も言葉数は少なく、一つひとつで完結します。読む者は一度に一つか二つの章だけを読んで、自分の受け止めるものに深く思いをはせるよう勧められています。

「新しいぶどう酒を古い革袋に入れる者はいない。そんなことをすれば、革袋は破れ、ぶどう酒は流れ出て、革袋もだめになる。新しいぶどう酒は、新しい革袋に入れるものだ。」イエス様の言葉に、デール先生は続けます、「私は絶えず新しい革袋を探し求めているのです」。

この本は、ただ新しいだけではなくて、生き生きとした革袋を与えてくれます。あなたはデール先生のことをとても深く知っているように感じるでしょうし、また同時に自分自身のことをさらに深く知るようになることを確信します。この本は長く「あなたと共にある」本なのです。（日本語訳：事務局）



☆編集後記☆ この1年のお支えに心より感謝申し上げます。直接にお会いすることはまだありませんが、その場で守られ、新しい年を主の深い恵みのうちにお迎えくださいますようお願いいたします。

発行：日本ルーテル神学校 附属研究所 デール・パストラル・センター 発行人：齋藤 衛

181-0015 東京都三鷹市大沢 3-10-20 TEL:0422-26-4580（直通） E-mail: dpc@luther.ac.jp <http://www.luther.ac.jp/>